

# かまれる人多い季節

## 「秋マムシ」に注意

### 田畑や郊外どこにでも生息



#### 強毒、治療怠ると命の危険性

夏から秋にかけては毒蛇のマムシの活動期だ。この時季のマムシは「秋マムシ」とも呼ばれ、子をおなかに抱えた雌が日光を求め、道路などで目にする機会が増える。強毒を持ち、治療を怠ると死ぬこともある。稲刈りの季節を迎え、いっそうの注意が必要となる。

「ススキがチッと触った感じだった」。霧島市牧園に住む新聞配達員・岡留隆美さん（59）は2年前の9月上旬夜、玄関を出てすぐに右足のアキレスけん付近をかまれた。激痛が走って足は大きく腫れ、歩くのも困難だった。「完治まで半年かかった。幻覚も見た。かまれたら地獄」

今年は配達中、道路際など梅雨の6、7月を中心に30匹以上見た。最近、マムシが多く、特に秋マムシは気が荒く攻撃的と恐怖を感じる。「とぐろを巻いているのは人に向かって50センチはジャンプする。知り合いが7、8人はかまれた。マムシが土手にいると、脇腹や肩もかまれる。どこにでもいる」と漏らす。

霧島市滑防局によると市内では毎年、数人がかまれて救急車で運ばれる。同市牧園で40年近く患者を診る春田医院の春田皓之院長（76）は「秋はかまれる人が増える。昔は、稲刈りをする時季に田んぼに出た」と語る。

日本蛇族学術研究所（群馬県）の調べでは国内の被害者は年間約3千人。マムシは水辺を好むが、堺淳主任研究員（60）は「天気が上がった後、日光浴に現れる。夕方や夜になると雌雄に関係なく庭、駐車場、道路に出てくる。郊外だとどこにでもいる。九州や中国、四国地方など暖かい西日本でかまれる人が多い」と説明する。

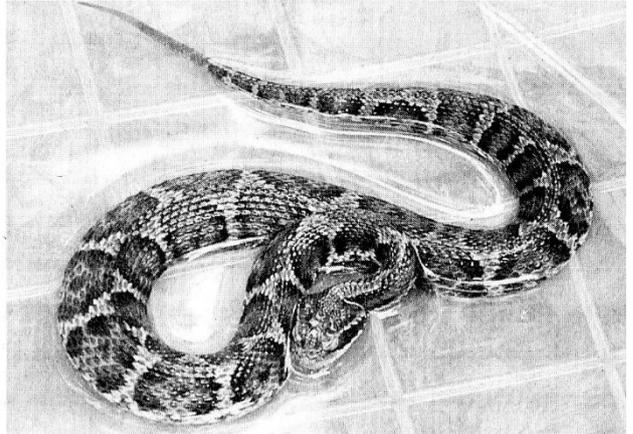
また、マムシは小さいため①夜や草むらでかまれても本人が分からない②医療機関で虫刺されと勘違いされ、手当が遅れることがある③体が茶系で、落ち葉と見分けが付きにくいなどの問題点があるという。

県立博物館の池俊人学芸主事（47）は「ゴム製の長靴を履くと、鼻と目の間にあるピットが熱を感知しにくい」とアドバイス。大井病院（始良市加治木）の矢野謙二院長（64）は「かまれたら救急車を呼んでほしい。治療が遅れるほど腫れて、毒も回る」と注意を促す。（清水裕貴）

## Q マムシ

ズーム  
日本では「ニホンマムシ」が多い。ニホンマムシはクサリヘゼ科マムシ属。体長は40～80センチ、太さは3センチほど。背面は褐色の銭形模様、頭は三角形。屋久島より北に分布し、森林ややぶ、田んぼなど水辺、湿気を好み、カエルやネズミを食べる。夜行性だが「妊娠中の雌や冬眠前は昼間も活動するため、かまれるケースが増える。上あごに毒牙があり、毒が体内に入り治療しなかったり遅れたりすると、まれに死亡する。ハブより体が小さい分、毒量は少ないが、毒性は2倍といわれる。

攻撃的なマムシ。  
秋は活動が活発になる  
霧島市牧園



平成27年9月21日（月）／南日本新聞